

各国の識者にきく

中ソ30年目の和解

中国の鄧小平・中央軍事委主席とソ連のゴルバチョフ・書記長は十五日から四日間、北京で歴史的な首脳会談を行う。両国が路線の対立から離反していた三十年間に国際政治の潮流は対決からデタントへ、軍事よりも経済重視へと大きな変化を見た。一九五九年以来、三十年目の和解にこぎつけた両社会主義大国への熱い期待とそれを見守る各国の視点を、それぞれの専門家に語ってもらった。

この五月十五日から十八日 だちをつのらせていることだまで、歴史的な中ソ首脳会談ろう。

が北京で開かれようとしている。それにしても、今回のゴルバチョフ訪中による三十年ぶりの中ソ首脳会談への道程は、あまりにもドラマチックな現代史の一章であった。

紀のサミットを目前にひかえ、中ソ対立は、歴史的な民族の指導者のみならず、ゴルバチョフの出会い以来の党対党

中嶋嶺雄・東外大教授



共通基盤強化の一段階

> ① <

な様相があった。五〇年代の端と正統をめぐる非妥協的ないわゆる「一枚岩の団結」も、実際に虚構であったのだ。が、こうした潜在的対立は一九五六年の「スターリン批判」を契機としてイデオロギ対立から、さらには国益上

立、中ソ対立表面化以来の政府間対立という四つのレベルの対立構造が重層的に一体化していったところに、その深刻

軸とした戦後国際政治上の重大なイシューともなり、ソ連の「脅威」に対処するための米・中・日の連携

は、経済の停滞、科学技術の立ち遅れ、党官僚国家の硬直、指導層と国民大衆の離反、国内少数民族の反乱などを露呈し、もはや中ソ対立が発生したところの活力はすっかり失われてしまった。同時に、イデオロギの終焉(しゅうえん)をよきなくされ、自由化」「民主化」の波にさらされながら、中国もソ連も「改革」「ペレストロイカ」を掲げて不確かな未来への再出発を開始せざるを得なくなってきた。

か)をししている余裕もなくなっている中ソ両国は、今回の首脳会談を契機に、相互補完、相互学習の度をさらに深めてゆくであろう。

そして中ソ和解を軸とした社会主義世界の「ゆるやかな同盟」関係の構築を次のステップとして迫られるであろうが、そのことが直接的に軍事的な脅威の再生産をもたらすものではないところに、軍事よりも経済主導へという今日(けう)の世界的潮流が反映している。しかし、わが国は、かつての米中接近、先ごろの米ソ接近、そして今回の中ソ接近とつねに同盟国や友好国に頭を越されつつあっただけに、将来の中ソ関係の展開を甘く見てタカをくくっていると、経済大国・日本の国際社会での孤立化がさらに深まり、四方八方から叩かれるということになるかもしれない。

社会主義活性化へ連携

であった。この間、社会主義の世界